

蛸石

訪問者、もしくは攻撃者が大阪城（当時は大坂城）の城郭内奥深くまでたどり着くためには、まずはじめにこの堅固な場所を通り抜ける必要があった。かつてこの巨大な石壁の上には木造の長い回廊が設けられており、ここから守備側の人間が桜門を監視できるようになっていた。この木造回廊は明治維新の混乱の最中で 1868 年に焼失したが、花崗岩でできたこの巨大な石壁は残った。この石壁は、大坂の陣（1614-1615）の後に大阪城のこの部分の修繕を担当した大名である池田忠雄（1602-1632）によって 1624 年に築かれた。

この石壁の中で最も大きな石は蛸石と呼ばれ、重さは 108 トン、表面積は 60 平方メートルあり、大坂城で使われている石の中でも最大のものである。池田忠雄は備前国（現在の岡山県）でその石を採石し、100km 以上離れた大阪城まで運んだ。蛸石という呼称は左下部にあるまだら模様由来し、それが蛸の形に似ているからと言われている。